

2015年度 共同生活援助事業 報告書

山本靖雄

2015年度は「秋篠ハウス5名（男性）」・「若葉ハウス5名（女性）」・「富雄ハウス5名（女性）」の3事業所で実施した。

◎秋篠ハウス・若葉ハウスはともに年数が経つにつれて入居者・スタッフ間の連携がより密に取れるようになった。施設とは違いグループホームでは「自分の家・部屋」という意識が強く、生活の基盤・くつろげる場所・心が休まる場所・楽しめる場所となってきており、各人が定着して利用できている状況である。

しかし、一方で入居者の年齢が上がるにつれ体力的・体調的な面に不安も出てきている。（足のふらつき・入浴介助・病気・通院・薬の増加・睡眠の不安定）その都度、入居者の状況に柔軟に対応している。また、家族との連携も大切にし、お互い家庭での状況、ホームでの状況の確認を行っている。

◎富雄ハウスは開所して1年が経ち、始めは旅行感覚の宿泊であったが徐々に「自分の家・部屋」という意識が強くなってきている。入居者は就職している人や就労B型の利用者が多く基本的には自立している。初めは家との違いに戸惑う人もいたが、家とは違う生活パターンや楽しみ方を見つけて生活している。自分の意思や気持ちを表現ができなかった人も宿泊スタッフや施設スタッフに徐々にではあるが気持ちを伝えられるようになりつつある。体調面に気を遣う（肥満等）人が数名おりサポートシステムの移動支援等を利用し月3、4回1時間程度の散歩に出かけている。また、サポートシステムを利用し休日に買い物や外出を楽しむ人もいる。

各ホームの特徴として、秋篠ハウスは食事の時間以外は自分の部屋での趣味の時間を大切に余暇を楽しんでいる。一方、若葉ハウスでは各々の部屋での余暇を楽しむ人、みんなと一緒に共有スペースでTVを一緒に見たり、カラオケをしたりスタッフと一緒に楽しむ人等過ごし方は様々である。富雄ハウスにおいては、世話人と一緒に食事の後片づけ、洗濯等も積極的に行い、自分の生活の一環としている。余暇に関しては、共有スペースで、世話人との会話やTVを楽しんだり、各人自室で過ごす事も多くみられる。このようにホームごとに様々な特色がある。

自室の管理は基本的に本人にお願いしているが、なかなか管理できないこともあり世話人の支援を必要としている利用者が多いホームもある。反面、人によっては自室への世話人の入室を断り、掃除や片付けの課題をもちながらも自己管理している人もいる。

支援体制としては、スタッフ間の連携も密にし、夜間体制を十分にとることを心がけ避難訓練を定期的実施し、災害時の対応を行っている。また、世話人、生活支援員の連携会議を定期的持ち、施設、家庭等との情報の交換や、支援者の悩みごとの相談、グループホームの法律的な位置付や目的の確認及び障害者理解に関する研修等を実施した。

交流面では地域との繋がりを大切にし、いろいろな行事への参加や毎年の奈良市のグループホーム交流会に参加し、他施設の職員・利用者との交流も行ってきた。

富雄ハウスにおいては、中町の役員の方々から声をかけていただき、自治会へ参加している。各ホームにおいても近隣住民とのトラブルもなく過ごせている。

◎今後の課題として

設備面では平成 30 年までにスプリンクラーの設置が義務化されている。しかし、あゆみの会としては水道管や構造上の問題、経費など様々な問題もある。現在は利用区分と夜間支援体制の関係上、全グループホームが免除になっているが、今後の法律の動き次第では何らかの措置が必要と思われる。

また、ホームの建物の修理、家電の老朽化による買い替え等々も必要になってくることが考えられる。

世話人および生活支援員等の支援者への研修にも今後力を注ぎ、より良いホームでの支援に繋がるよう計画する。

利用者数及び支援者数

グループホーム名	入居者状況	世話人数
若葉ハウス	区分 2:1 名、 区分 5:2 名	5 名
秋篠ハウス	区分 3:1 名 区分 5:4 名	5 名
富雄ハウス	区分 3:1 名 区分 4:4 名	4 名

サービス管理責任者 1 名